

目的 自分の生活は中流であると考えている人々が、9割近く存在する今日、家計相談に投稿する人々の、家計の悩みを年代別に分析し、今後の生活設計の指導の資料とすることを目的としている。

方法 リビング新聞東日本（仙台、福島、首都圏、湘南、西相、静岡）地区の「三宅栄子の家計簿拝見」に、昭和60年5月から61年12月までに投稿された家計簿と相談事項を、年代別、所得階層別に分類し、その特徴をみた。

結果 投稿総数600部の中から、勤労者世帯493を年代別、所得階層別に分類し、分析検討した。60年の投稿者は30代が最も多く、次いで40代、20代であった。61年になると、20代が最も多く、次いで30代、40代となった。投稿者の9割が首都圏と湘南地区であった。投稿者の493世帯を世帯主年齢別にみると、30代が最も多く特に30代前半の相談内容は、「貯蓄をふやしたい」という要望が最も多く、貯蓄をふやすために、消費をおさえて努力をしている世帯の家計診断の希望が多くみられた。また、貯蓄を1000万円前後所有している人の多くは、「住宅」購入の希望があり、住宅ローン返済にあたって家計の見直しの相談が多くみられた。世帯主年齢が40代前後になると返済中の住宅ローンと教育費の準備、老後資金のための準備の相談が多くなっていた。その他若い世帯の場合、共働きを出産退職でやめる場合の家計費の各費目のバランス、予算のたてかたの相談、出産後、親との同居の問題などの相談がみられた。若い世代では生命保険の選び方の相談も多く、生命保険に関する情報提供や教育の必要性も感じられた。